

平成二十七年度学位記授与式式辞

平成二十八年三月二十日（日）
アイザック小杉文化ホール ラポール

本日、石井知事をはじめ多くのご来賓の皆様をお迎えし、平成二十七年度富山県立大学工学部・大学院工学研究科の学位記授与式を挙行できますことは、誠に喜びに堪えません。これも、ご来賓の皆様をはじめこれまで本学の教育・研究を支えてくださった多くの関係の皆様のご支援、ご尽力の賜であり、教職員を代表し、心から御礼を申し上げます。

そして、今日の佳き日を迎えられた工学部・大学院、計三〇六名の卒業生・修了生の皆さん、本当におめでとうございます。また、ご家族の皆様には、お喜びも一入のことと存じます。

さて、皆さんは本学在学中に、多くの研鑽を積み、講義や実習、あるいは学位論文研究に取り組み、また、友人や教職員との交わりを通して、専門知識のみならず、物事を見通す目、考える力、専門分野において問題を捉え解決する手法、また、コミュニケーション力や、自己学習力など、エンジニア（engineer）やリサーチャー（researcher）として、必要な能力に加え、人生・社会を生きていく上で大切な様々な「力（ability）」を習得されてきたと思います。

中でも、コミュニケーション力については、日本経済団体連合会（経団連）が会員企業に対して毎年実施しているアンケートにおいて、「採用時に最も重視する要素」として、十二年連続でトップとなっています。

皆さんのなかには、社会に出て活躍される方、また大学院に進んで、さらに勉学を深めようとする方がおられますが、いずれの道に進まれるにしても、これから、きっと仕事や研究でグローバルなコミュニケーション力が必要になります。私も行く先々で企業経営者の皆さんから、とりわけグローバル人材の育成を強くお願いされています。

私は、本日卒業・修了される皆さんには、グローバルなコミュニケーションに必要な知識、基礎的な力は、十分教授したと自負しています。これからそれを十分発揮し、うまく応用していくために必要なのは、皆さん自身による意識的な努力、積極性であります。

その努力、積極性の手がかりとして、本日、わたくしは、国際的な場での、英語でのコミュニケーション力を例に取り上げてみたいと思います。

日本人は英語が苦手、さらに積極的な発言が苦手とされています。かく言うわたくしもその一人ですが。昔から、日本には「沈黙は金（きん）である」とか「以心伝心」などの言葉があるほか、「謙虚さ」を重んずる風潮があります。その反面で日本人は「はずかしがりや」として有名です。日本人は英語が苦手といわれてい

ますが、これは英語ができないという意味ではなく、「はずかしがりや」が災いして、会議などで発言できないための誤解だともっています。

そこで、戦後日本のビジネス社会で、「国際派」の代表として活躍された両極端のお二人を紹介したいと思います。両極端とは、英語力のことです。一人は、評論家として活躍している元マッキンゼー・ジャパン会長の大前研一氏、もう一人は、元ソニー会長の盛田昭夫氏です。

大前氏は、外資系企業で働いていたことや、濃密な英語経験のバックグラウンドもあって、その英語力は群を抜いています。私が米国出張の際、たまたま見たテレビに、経済問題に関して意見を求められた大前氏が現れ、ネイティブ顔まけの英語で自身の主張をしていたことを記憶しています。そのとき、私は、「すごいなあ」と思いつつも、「でも、ちょっと違うな」と正直思いました。つまり、レベルが高すぎてうらやましくはあるけれども、自分の参考にはならないということです。

その逆が元ソニー会長の盛田昭夫氏でしょう。盛田氏は英語を話す企業トップとしても知られた人ですが、どの紹介記事にも、彼の英語は、うまい英語ではなく、むしろ下手で、発音も良くないし、文章力もそれほどあるわけではないと書かれています。しかし、それでも盛田氏の英語は内容が明快で、説得力があったことは間違いないようで、だからこそ、国際的に受け入れられたのだと思います。最近、元ソニーに勤めていた方で、盛田氏をよく知る人に会う機会がありました。私が、「盛田さんの英語はブロークンだったと聞いていますが、どんな感じだったのでしょうか」と聞いたら、その人いわく、「冷静なときはまだいいが、興奮すると、ブロークンなんていうものではない。その場で一緒にいた外人に聞いたが『何をいつているのかわからない、ただ盛田が何かを言おうとしていることだけはわかる』といった」そうです。

私はこれを聞いて、大前氏へのうらやましさととは違う、別の意味のうらやましさを感じました。それは、なんでも自分の意見を伝えようとする盛田氏の積極的な姿勢です。大切なのは文法やイントネーションなど見てくれの部分ではなく、会話の論理的な展開や、自分が手に入れた情報の新しさ、正確さ、さらにそれらに対する自信の裏付けがあることが、彼のコミュニケーションを支える重要な要素になっているのだと思います。

盛田氏の英語に込められた説得力は、私達の英語への姿勢を考えるにあたって参考となるだけでなく、さらに何事においても、積極的に取り組む、チャレンジする意欲、姿勢の重要さという点で多くの示唆を与えていると思います。すなわち、国際的な場面に限らず、どのような場所・事柄でも、大学や大学院で学んだベーシックを土台にして、十分熟慮・検討したうえでの論理の展開、最新で正確な情報の積極的な取得、そしてこうした努力をした事の結果としての自信は、皆さんの身を助けてくれると思います。恥ずかしがらず、自信をもって、良い意味で積極的な面を表に出すように意識的に努力してほしいと思います。

さらに、厳しい言い方に聞こえるかもしれませんが、皆さんが四年乃至六年間、またある方は九年間の在学期間で学んだ知識は、数年のうちに時代遅れになってしまう可能性もあります。社会の第一線で活躍し続けて行くためには、本学キャンパ

スを離れた後も、絶えず学び続ける必要があります。それは自らが大学で選んだ研究分野とは異なるものかもしれませんが。しかし皆さんは、本学での教育、研究で、学びの下地を十分に身に付けておりますので、さらに積極果敢の意識を持ち、努力、傾注していただくことで、卒業後も学び続け、どんな環境にも対応できる人材となってくれるものと、私たち教員一同信じています。

皆さんの前途には、たくさんのやりがいのある、意義深い仕事があります。皆さんの将来は希望に満ちています。それでも、もし、迷ったり悩んだりしたら、本学を思い出してください。そして、気軽に本学に立ち寄ってみてください。進化し続ける研究室を目の当たりにすれば、自分の立場を改めて認識できるはずです。私たちはいつでも歓迎します。

また、大学院に進学する皆さんには、グローバルな視点でものを考え、行動することを、さらに学んで欲しいと思います。

このため、研究成果を出した大学院生については、可能な限り、国際学会に参加させ、英語で発表する機会を与えるよう、私から全教員にお願いしていますので、自らの国際性を深めるチャンスが用意されています。皆さんには、このような絶好の機会を逃さないようにしていただきたいと思います。

富山県立大学は、昨年4月の公立大学法人化に伴い、県内産業への人材供給と若者の定着に貢献し、一層魅力ある大学となるよう目標を定め、学科拡充、学部創設に向けた具体的な歩みを進めております。

私をはじめ教職員一同は、今後とも皆さんに卒業生・修了生であることを誇りと思い、自慢していただけるような大学づくりを目指し、今の歩みを止めず、着実に進めていきたいと考えております。

皆さんも温かい目でこの発展を見ていただきたいと思いますし、自己研鑽を積んで、ぜひ「富山県立大学の卒業生はどこか違うなあ」と言われる存在になってください。

改めて言いますが、国内、国際の別を問わず、新たな環境に置かれた場合には、決して恥ずかしがらず、自信をもって、積極的な面を表に出すように意識的に努力してほしいと思います。

卒業生の皆さんが、積極性を持って、これからの仕事、勉学に取り組み、県立大学出身であることを誇りに、社会に貢献する立派なエンジニア（engineer）やリサーチャー（researcher）として、大きく、大きく成長されますよう心から、心から祈念し、私の式辞といたします。

平成二十八年三月二十日

富山県立大学 学長 石塚 勝